

6 ギメ東洋美術館「Mingei Bamboo Prize」展（2020年10月27日）

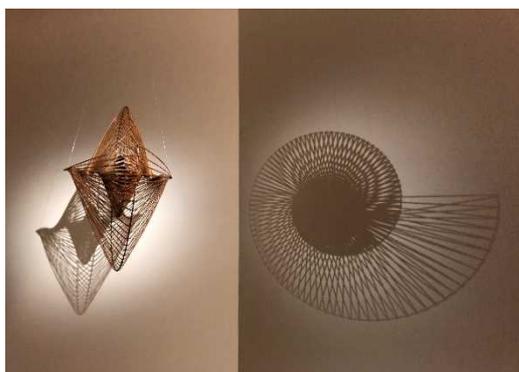
ギメ東洋美術館において、展覧会「L' Asie Maintenant」の一環として、日本の竹細工を展示する「Mingei Bamboo Prize」が開催されています（2021年1月25日まで）。パリにあるギャラリー・ミンゲイ（Galerie Mingei）が選んだ現代の日本人の作家による11点の竹細工の中から、11月24日にギメ東洋美術館のマカリウ館長を委員長とする審査委員によって、第一回「Mingei Bamboo Prize」が決定します。同時に14点の作品も展示されています。



1925年（大正14年）、民衆の用いる日用品の美しさに着目した思想家の柳宗悦は、陶芸家の濱田庄司や河井寛次郎らとともに民芸運動を起こし、無名の職人達が作った民衆的工芸品を「民藝」と名付けました。道具を「用いる」ことによって生まれる「美しさ」を表現する「用の美」という言葉も生まれました。

竹は、日本の広い地域で育つことと加工しやすいことから、昔から日本人の生活に深く根付いています。かつての農作業では竹かごを使いました。昔の子どもたちは、竹トンボや竹の水鉄砲などのおもちゃで遊びました。今でも、茶道では竹細工の花入れを使いますし、ざるなどの台所用品に竹細工を選ぶ方もいます。

日用品だった竹細工は、次第に美術工芸品として認められるようになり、今では現代作家による竹細工が次々と発表されています。この展覧会では、伝統的な高度な職人技を用いた現代的なデザインで、繊細さと力強さを感じる作品が展示されています。来場者によるQRコードを使った投票で、Le Prix du Public Guimet - Mingei 賞が選ばれます。皆さんも会場でお気に入りの作品を見つけて、ぜひ投票に参加してください（投票は11月24日まで）。お花は、パリで活躍する華道家 Ryu KUBOTA さんの作品です。



パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

ギメ東洋美術館では、日本の縄文時代の土器や埴輪から現代作家の作品まで、日本美術史の概観を紹介する作品が常設展示されています。ギメ東洋美術館を訪問される際には、合わせて常設展示もご覧ください。